

水野 一・西沢利栄編『ラテンアメリカの環境と開発』（ラテンアメリカ・シリーズ7）新評論 1997年 294ページ

本書は、経済学や地理学を専門とする12人の地域研究者が、ラテンアメリカの開発に伴う環境問題について執筆している。第一部で基本問題として取り上げられているものは、自然環境の特色、先住民の環境利用、森林伐採、都市化による環境悪化、地球環境問題への対応など、広範囲に及ぶ。第2部では主要国ごとにそれぞれが直面する環境問題と環境政策をまとめている。

本書で取り上げられている環境問題には、森林や土壌などの自然資源の劣化、産業化による公害、都市生活基盤の不足、自動車排ガス汚染、そして温暖化に代表される地球規模の問題など、さまざまな局面がある。一般に発展途上国においては、環境問題が進行する速度が速く、多様な問題が一度に発生するうえに、貧困の克服という課題を追求しながら環境破壊を防がなければならない。経済が国際化し、地球環境問題への認識が世界的に高まる中で、開発と環境保全の両立を目指さざるを得ない、発展途上国の苦悩が本書を通じて浮かび上がってくる。特にラテンアメリカの事例からは、アマゾンの開発に見られるように、環境破壊は開発の成功に伴うものであるばかりでなく、開発の失敗によっても深刻な環境破壊がもたらされることがよくわかる。

さまざまな専門分野を持つ地域研究者を組織して地球の多様な環境問題を取り扱った学際的な研究書

として、本書は画期的であり大変充実している。

(寺尾忠能)

Interamerican Development Bank, *Latin America after a Decade of Reforms-Economic and Social Progress in Latin America 1997 Report*, Washington, D.C., 1997, vii + 295 p.

米州開発銀行のラテンアメリカの経済社会発展に関する1997年次報告書。「改革10年後のラテンアメリカ」というテーマで、ラテンアメリカの経済改革、民主化の成果を評価し、課題を示している。

報告書は、構造改革が全体として経済成長と低所得層の所得向上に寄与したとして高く評価している。個別の分野では、改革が貿易、金融自由化では進展したが、税制、民営化については不十分な国が存在し、さらに労働市場ではまったく進展がないとし、そのうえで、構造改革になお大きな余地があり、それが実現すればラテンアメリカの長期的な成長率は5%にまで、さらに教育改革が実現すれば7%まで高まるであろうと、構造改革に無邪気な礼賛を送っている。

しかしながら、改革がどのような因果で高い成果をもたらしたか、そのメカニズム、構造を解明してはいない。

報告書はまた、ラテンアメリカにおける民主化、分権化の進展が財政を健全なものとする一方で、なお政府の予算、支出を監視する制度が不十分であると指摘している。興味深い分析、情報に溢れている

が、必要とされる制度について明確な答えはない。
 こうした意味で不満は残るが、自由化をめぐる議論の格好の材料となることは確かである。

(小池洋一)

小田輝穂著『カヌードス・百年の記憶』現代企画室 1997年 266ページ

今年はブラジル史上最大のミステリーとされるカヌードス事件終結からちょうど100年を迎え、*Veja* 誌(9月3日号)でも特集記事が掲載された。

ブラジルの北東部バイーア州の奥地、カヌードスでは、宣教師アントニオ・コンセリエイロを指導者として、最盛期は2万5000人もの人々が「約束の地」建設を試みて数年にわたって半自給自足の共同体生活を送っていた。当時誕生したばかりの共和国政府はこれを狂信者による反乱と捉え、軍隊を派遣してこれを壊滅しようとした。共同体も武装して半年余りの間3度にわたる遠征隊の攻撃に耐えたが、9月にコンセリエイロは病没し、10月5日にカヌードスは陥落した。この経緯については従軍ジャーナリスト、エウクリエス・ダ・クレーニャが“Os Sertões”という長大なルポを残している。

本書は、このカヌードス事件に光を当て、貧困に苦しむ奥地の農民の実像は現在も変わりがなく、カヌードスが再生される土壌が今も存在することを、現地取材に基づいて明らかにしている。

(浜口伸明)

柳田利夫著『リマの日系人：ペルーにおける日系社会の多角的分析』明石書店 1997年 426ページ

本書は1995年に行なった共同研究「リマ日系社会総合調査」の成果をまとめた論文集である。歴史学、社会学、政治学、文化人類学、言語学、精神医学など多彩な分野の研究者が集まった共同研究であることから、内容は非常に多角的なものとなっている。

第一部「日系社会の形成と変容」ではリマ在住福島県人の事例をもとに日系人の呼び寄せネットワークについてや、言語変容、宗教、日本への出稼ぎによるエスニシティ変容や政治参加について論じられ、第二部「日系社会の現状」では日系人のライフスタイルや健康、新たなエスニシティの形成等について論じられている。最後の「日系社会からの報告」では日系人2名によって日系人の政治意識や日系二世の政治参加について報告されている。

日系人家族のライフヒストリーをもとに、日本への出稼ぎというプロセスを経た彼らのエスニシティの変容を分析している有末論文や、リマの日系社会が「純日系人、混血日系人、そして非日系人を内包し、多様性を持ち自ら変容しながら新しい *los nikkei* アイデンティティ形成の道を歩もうとしている」とと分析する柳田論文など大変興味深い。

(村井友子)